様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月１７日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520476
研究課題名（和文）　日本人英語学習者における一致形態素使用の随意性の要因に関する研究
研究課題名（英文）　The study on factors of optional use of agreement morphemes by Japanese learners of English

研究代表者
坂内　昌徳（BANNAI MASANORI）
福島工業高等専門学校・一般教科（英語）・准教授
研究者番号：60321387

研究成果の概要：日本人英語学習者(JLEs)の持つ文法知識について、主語と動詞の一致を示す形態素（即ち「３単現の-s」と規則動詞過去形の形態素「-ed」の使用に焦点をあてて調査した。JLEs の持つ文法システムは英語母語話者の持つ文法システムとは質的に異なることを示す実験データが得られた。この結果は、第二言語においては特定の文法特性が習得困難であることを示唆する。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	500,000	0	500,000
２００７年度	500,000	150,000	650,000
２００８年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,400,000	270,000	1,670,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：細目：言語学・外国語教育
キーワード：第二言語習得理論　文法形態素　日本人英語学習者

１．研究開始当初の背景
第二言語習得研究は 1960 年代に産声をあげ、言語学を中心とする周辺科学の発展とともにその理論的・実証的研究が進められてきた。その中で第二言語学習者に特徴的な誤りがあることや、文法の発達には特定のパターンがあることが 1970 年代から指摘されてきた。また、第二言語習得においても、母語習得によく言われる「言語習得の論理的問題」または「刺激の貧困」という状況が存在することを示す研究が数多くなされてきている。しかし一方で、形態や統語などの特定の領域について、第二言語話者の発話には目標言語の母語話者のレベルからはかけ離れた状態が長く続くという事実が注目されるようになったのはごく最近のことである。しかし、これまでの研究は学習者の自由な発話をデータとして調査したものが多く、学習者の心的な言語表像を明らかにするには至っていない。さらに JLEs の文法知識について、より実験的手法を用いて考察し、現在提案されている主な第二言語習得モデル（仮説）を検証する

必要がある。

２．研究の目的

(1) JLEs における主語と動詞の一致について、一致に関わる主語と動詞の間に何らかの要素があった場合に、その要素が「３単現の-s」の使用にどのような影響を及ぼすのかを実験により調査する。

(2) JLEs が持つ動詞の繰上げ（例：Wexler, 1994）の知識について実験を通して調査し、JLEs の第二言語(L2)文法における動詞の統語的位置を明らかにする。

３．研究の方法

(1) 「３単現の-s」の使用についての実験

統語的コンテクストをコントロールした口頭英作文タスク(Context-controlled Oral Translation Task (COT)と絵による状況支援つき口頭英作文タスク(Picture-aided Oral Translation Task (POT))により実験を行った。これらのタスクはどちらも JLEs がどのような構造的コンテクストで3単現の-s/過去形の-ed の使用に際して困難を伴うのかを調査するねらいでデザインされた。下のような6タイプターゲット文を JLEs に口頭で英作文させ、音声データを書き起こして分析した。

a. The manager uses a DoCoMo phone.
b. The manager of the shop uses a DoCoMo phone.
c. The manager who won the lottery uses a DoCoMo phone.
d. The manager always uses a DoCoMo phone.
e. The manager of the shop always uses a DoCoMo phone.
f. The manager who won the lottery always uses a DoCoMo phone.

(2) 動詞の（非）繰上げの知識に関する実験

日本語には動詞の繰上げが存在しないとする主張(例: Fukui and Sakai 2003)に基づき、統語的な誤りに被験者が気づくと無意識にマッチング速度が遅れるという現象を応用した、センテンス・マッチング・タスクによって JLEs が以下のような実験文をマッチングする反応時間を計測して比較した。

The woman **often** loses the books.
The woman finds **sometimes** the pencils

４．研究成果

(1) 「３単現の-s」の使用についての実験では概略下の図１に示す結果が得られた。

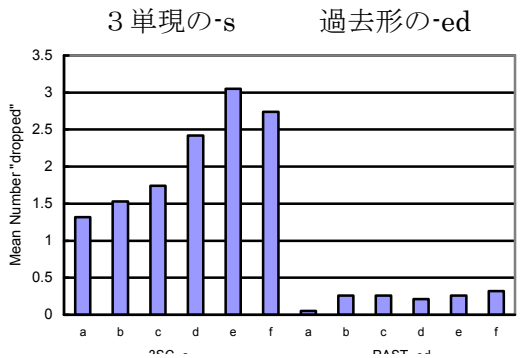

図１：口頭英作文におけるの脱落の頻度

上のデータに繰り返しのある分散分析(ANOVA)を適用したところ、３単現の-s と過去形の-ed 条件の間(F(1)=36.674, *p*= .000)、文タイプ間(F(5)=9.720, *p*= .000)に有意な差が見られ、３単現の-s/過去形-ed 条件と文タイプの間に相互作用(F(5)=7.422, *p*= .000)が見られた。したがって３単現の-s と過去形-ed 条件でそれぞれ別の ANOVA を行なったところ、文タイプの効果は３単現の-s 条件で有意(F(5)= 10.864, *p*= .000)であったが、過去形-ed 条件では有意でなかった (F(5)= 1.090, *p*= .372)。３単現の-s 条件での文タイプ間ペア比較 (post hoc LSD)の結果を表１に示す。こ

の結果から、JLEs の L2 文法では主語と動詞の間に副詞が介在する場合に３単現の-s が脱落しやすいということが分かった。副詞の存在により３単現の-s が正しく使用できなくなるという事実は、JLEs の L2 文法に主語と動詞の一致に関わる形式文法素性（人称・数）が正しく取り込まれていない可能性を示唆する。

表１：３単現の-s の脱落の文タイプ比較

		Sentence Types					
		a	b	c	d	e	f
Sentence Types	a	-	n.s.	n.s.	**	**	**
	b		-	n.s.	**	**	**
	c			-	*	**	**
	d				-	*	n.s.
	e					-	n.s.
	f						-

*p< .05, **p< .01

(2) 動詞の（非）繰上げの知識に関する実験

JLEs における動詞の（非）繰上げの知識に関しては下の図２のような結果が得られた。

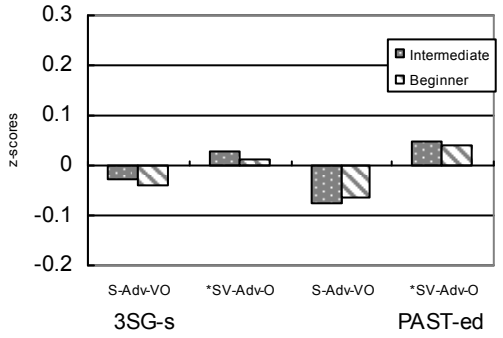

図２：センテンス・マッチングによる反応時間の比較

また、英語母語話者の結果は下の図３のようであった。

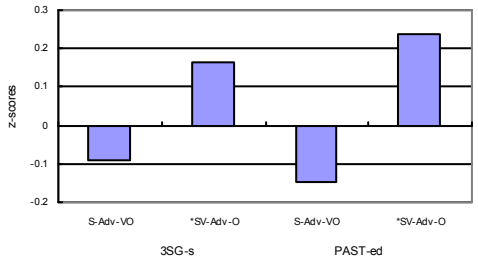

図３：英語母語話者の反応時間の比較

上記の結果から、JLEs は英語母語話者に比べて動詞の繰上げを含む文（非文法的）に対して鈍感であり、動詞の繰上げを含まない文とほぼ同様に処理していることが分かった。このことは、JLEs の L2 文法には動詞の繰上げの有無を支配している文法素性が正しく取り込まれていない可能性を示唆していると考えられる。

以上のデータから、JLEs の L2 文法には英語における主語と動詞の一致や動詞の（非）繰上げといった文法素性が正しく取り込まれない、あるいは取り込まれることが非常に困難であることが示唆される。このことは、第二言語において頻繁に報告されてきている動詞の屈折形態素の使用における随意性が、ある特定の文法素性を習得することが困難であるために生じているという見解を支持するものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計２件）

① Bannai, Masanori. L2 knowledge of verb placement by Japanese learners of English. *International Review of Applied Linguistics in Language Teaching 46*: 1-29. 2008. 査読有.

② 坂内昌徳.「英語中間文法における『３単現の-s』：日本語話者の[数]の一致に対する敏感度から」. 東北英語教育学会研究紀要第２９号: 17-31. 2009. 査読有.

〔学会発表〕（計４件）

① 坂内昌徳.「L2 モデルと日本人英語学習

者による動詞屈折の随意性」日本第二言語習得学会第６回年次大会，大東文化大学, 2006 年５月.

② 坂内昌徳.「日本人英語学習者の動詞の位置」日本第二言語習得学会第７回年次大会，静岡県立大学, 2007 年５月.

③ Bannai, Masanori. Selective optionality in verbal morpho-syntax by Japanese learners of English. The 17th annual conference of the European Second Language Association (EUROSLA17). University of Newcastle Upon Tyne, UK. 2007 年９月.

④ 坂内昌徳.「日本人英語学習者における動詞の形態統語の習得について」日本第二言語習得学会秋の研修会招待講演，横浜市開港記念会館, 2007 年１０月.

６．研究組織

(1)研究代表者

坂内　昌徳（BANNAI MASANORI）

福島工業高等専門学校・一般教科（英語）・准教授

研究者番号：６０３２１３８７